

大会山域の自然と歴史

宮崎県高千穂町は自然と文化豊かな山合いの地にあり、東は日之影町、北西には五ヶ瀬町、そして祖母山系を境に熊本県、大分県に接する所にある。大会山域は1965年、**祖母傾国定公園**として指定されたほか、2017年6月には人間と自然が共存している地域として「**祖母・傾・大崩ユネスコエコパーク**」に指定されるなど地域住民から愛され、また保護されている地域である。自然を愛し、めぐる心をもって山行に臨みたい。

さて、大会会場となる高千穂町は古くから**天孫降臨の地**の一つとされ、**天岩戸神社**には以下のような伝説も残っている。

「太陽の神であった**アマテラスオオミカミ**は、弟神・**スサノオノミコト**の粗暴な振る舞いを避けるように洞窟（天岩戸）の中に隠れこもってしまった。そのため、世界は暗闇となり、困った八百万（やおよろず）の神々たちは**天安河原（あまのやすかわら）**に集まり策を練った。

知恵の神である**オモイカネ**の妙案に従って、天岩戸の前で芸能の女神**ウズメ**が乱舞すると、衣をはだけさせて舞うその姿に周りの神々たちが騒ぎ立てた。この騒々しさに、**アマテラスオオミカミ**が何事かと天岩戸を少し開けて外の様子をうかがったところ、剛力の神**タチカラオノミコト**が重たい岩の戸を取り払い、太陽神を連れ出すことに成功。こうして世界は光を取り戻した。」

この神話をモチーフとした**夜神楽**は高千穂町各地に残されており、夜神楽は国の重要無形民俗文化財に指定されるなど、高千穂の名物となっている。

阿蘇火砕流が冷え固まってできた高千穂の地には、五ヶ瀬川が侵食した深い谷と急傾斜地のなかで切り開いてきた農耕がおこなわれてきている。先人たちは狭い土地で生態系を維持しながら農業を続けてきたため伝統的な農業光景が残されている。これらが認められ、高千穂町は「**UNESCO 世界農業遺産高千穂郷・椎葉山地域**」の構成地域ともなっている。また、深い谷には**柱状節理**が発達し、高千穂を代表する名瀑・**真名井の滝**のある高千穂峡があり、多くの観光客でにぎわっている。

さて、この山域には多くの花々や動植物が人間と共に生活をしている。

4月に入ると祖母山系にはマンサクの花が咲き始め、その後気温の上昇と共に九州にしかない**ツクシアケボノツツジ**や**サイゴクミツバツツジ**が咲いてくる。親父・障子山付近には**シャクナゲ**の群落もあり、県総体の頃には**オオヤマレンゲ**もみられる。初夏には**ヒメユリ**も咲き、旧五ヶ所小学校では地域ぐるみで保護活動に取り組んでいた。山頂部には9月以降、白く小さい花をつける**ウバダケニンジン**、祖母固有種の**オオウバダケニンジン**など**レッドデータブック**で絶滅危惧種とされている植物も存在する。冬から春にかけては宮崎県では珍しい**フクジュソウ**も咲き、登山者の目を楽しませる。また、樹木に目を向けると、スギやヒノキの人工林のほか、宮崎県では標高の高い所でしか見られない**ブナ**や**カラマツ**といった落葉樹もみられ、宮崎に居ながら東北日本の樹林帯を体験できる所でもある。

また、それらの植物や植生が育つには高千穂を代表する景観である**雲海**も欠かせない。これは風が弱く、地表面が放射冷却で冷やされ、水蒸気が飽和状態になることで起こる現象で、標高の高い所が島、雲が海のように見えるのでそう名付けられたという。国見ヶ丘からみる**雲海**は素晴らしく、今回も運が良ければ山頂付近から見えるのではないだろうか。期待したい。

第1日目 常光寺の滝～尾平越トンネル～古祖母山～障子岳～親父山～四季見橋（古祖母山コース）

古祖母山は遠くから観てもたおやかな山容をみせる特徴的な山である。この山の名前の由来は、諸説あり、はっきりしたことはわかっていないが、祖母山との関係で名付けられたことは間違いないだろう。

さて、古祖母の南側には多くの鉱山が存在していたのを知っているだろうか。そのうち、古祖母の南にある土呂久鉱山は、安土桃山時代から銀や錫を採掘していた鉱山で有名であった。しかし、明治初めにはその資源も尽き、農業に用いられるヒ素の採掘を始めた。そのヒ素の精製の際、煙によって人体の内外を冒し、田畑や山林も枯れ果てる惨状であったという。戦中以降再び錫や鉛の生産がおこなわれてきたが、鉱物の副産物のヒ素による健康被害が社会問題化し、1973年に「慢性ヒ素中毒症」として公害に認定された。現在でもこの後遺症に苦しむ患者の方が語り部の活動を行い、ヒ素中毒の恐ろしさを後世に伝える活動を行っている。

話を元に戻そう。県道7号から常光寺の滝の地点から歩いて行く。この先、路肩の崩壊があるため、それに気をつけながらアスファルトの道を4kmほど進んでいこう。途中はスギなどの人工林がみえるが、近年伐採が進み大きな木がないところもある。急傾斜のところでは土砂崩れにも警戒したい。やがて、大分の尾平鉱山に向かう尾平越トンネルの宮崎県側から登っていく。駐車場から針葉樹を縫いながら登っていくと、尾平越の十字路につく。かつては鉄塔のあった縦走路だが、今はその残骸を観るに過ぎない。どんどん縦走路を進み、スズタケ・ブナ・アケノボノツツジの道を進んでいくと途中1426mの露岩に到着。展望もよく、気持ちよく景色を楽しみたい。南西方向に足を進めると岩壁にハシゴが設置された地点がある。気をつけて進んでいくと、また絶景の広がるポイントにさしかかる。チーム全員で景色を楽しんでいくこととする。この後は緩やかな上り坂から一気に山頂への急登にさしかかる。ハシゴ場から15分ほど進むと標高1633.1mの古祖母山に到着。山頂も広く、南には六峰街道、東には日隠山や五葉岳、大崩山の山頂も見渡すことができる。

さて、障子岳に向かうとする。古祖母山から北東方向へと足を伸ばすとよく気づくかと思うが、進行方向右手が急斜面、左側が比較的緩やかであることがわかる。これは傾山や祖母山が火山活動を行っていたはじめの頃、大分県側の地域が陥没してできたコールドロン構造と呼ばれるものと関係が深いという。昔の地形に思いをはせながら鞍部から登り返すと障子岳（1709m）の山頂となる。山頂には熊ノ社があり、北方向に行くと烏帽子岩や天狗岩・祖母山への縦走路、西方向に進むと親父山である。初夏にはオオヤマレンゲも見られる尾根筋を曲がると第二次世界大戦が終わった後に墜落したB-29の墜落木柱がある。いまでもその残骸が残っており、墜落のすさまじさとともにかつて敵だったアメリカ軍兵士への哀悼の念が注がれている。その鞍部を過ぎると「ツキノワグマ」を意味する親父山（1644.2m）に到着する。ちなみに現在では熊は九州において絶滅したとされている。そこからすぐに黒岳（1578m）への分岐があるが、そこを南に進みシャクナゲやアケボノツツジに恵まれた平坦地を進むと親父山登山口はすぐ。最後のあれた林道を進むと四季見橋へ到着となる。

第二日目 コース紹介

旧五ヶ所小学校～筒が岳～千間平～国観峠～祖母山～風穴～北谷～旧五ヶ所小学校（祖母山コース）

祖母傾国定公園の主峰、そしてユネスコエコパークの核心地域である祖母山（1756.4m）は古くから信仰を集める霊山としても知られ、日向（現在の宮崎県）と豊後（現在の大分県）の県境を構成する尾根がなだらかに広がる山である。祖母山の名前の由来は、祖母山の麓で「花の本（トヨタマヒメ）」が若者

に姿を変えた大蛇との子（あかぎれの童子）を父とするカムヤマトイワレヒコ（神武天皇）の祖母に当たり、それをまつていることからソホリタケが転じ**祖母山**となったといわれる。ちなみにあかぎれの童子の子孫は後に三田井姓を名乗り、高千穂町三田井という地名も残っている。祖母嶽神社**北谷登山口**に向う旧五ヶ所小学校の西方に本社、**北谷登山口**に行く途中に奥宮がある。なお、この山は深田久弥の日本百名山の一つとして数えられているほど名高い。また、その登山を明治時代に行ったウェストン牧師（日本アルプスの命名者）の足跡をしのぶため、毎年11月3日にウェストン祭が三秀台で行われている。

さて**祖母山**を登っていくこととしよう。旧五ヶ所小学校を過ぎ、県道を約800m北進し、筒が岳登山口の道標から林道に入る。ダートとアスファルトの交互の林道を進んでゆくと道幅が狭くなり登山道になる。尾根を巻いたり谷に入ったり、鹿よけネットをくぐりながら進むと筒が岳と筒が岳岩峰を結ぶ稜線に到着する。稜線を右に進むと2連のアルミハシゴのかかった岩峰で、阿蘇から祖母山系まで見渡せる絶好のポイントとなっているが、今回は稜線を左に進む。三角点のある**筒が岳（1292.9m）**を過ぎるとジグザグの登り道を進み1446.1m三角点に到着する。ここも展望の良いポイントだ。三角点から下ると平坦な場所になり、右から北谷登山口からの登山道が合流する。この付近が千間平と呼ばれるエリアである。ここから比較的平坦な上り下りを繰り返しながら進んでいく。また、荒地が植林地となって針葉樹林となったり、広葉樹林が針葉樹林になったりと、地形図では分からない植生もみられる。よく地形図と対照させながら進んでいくのもよい。コーステープに注意しながら進んでいこう。そして、熊本・大分・宮崎にまたがる**三県境**に到る。まだ食害の進んでいない笹地の植生もみられる道を抜け、**国観峠（1486m）**に出る。この広場は植生が伐採されて、広場となっている。この広場を後方左手に行くと大分側から登る**神原コース**につながる。ここで一息入れていよいよ上り詰めていく。黒ボク土と彫れた登山道に注意しながら一気に登っていくこととする。途中、9合目小屋への分岐が二カ所ある。以前は期間限定で管理人が常駐しており、宿泊も有料で行っていたが、2018年4月から無料の避難小屋となった。宿泊も可能で宿泊費が無料だが、九州の中で貴重な管理人さんの居る小屋がなくなってしまった。

話が横にそれたが、息を切らせて登っていくと**祖母山頂**である。一等三角点となっているこの山頂には祠が三体置かれており、かつては女人禁制の山だったといわれる。ここから南には黒岳・親父山・障子岳・傾山の一連の稜線が見渡せるほか、北には竹田の市街地や田畑などが見渡せ、遠くまで見渡せる気候条件であればくじゅうの山並みをみることができる。

下りは風穴コース経由で北谷へ進路をとり、左手側に下っていく。途中やせ尾根や落石に注意する地点があるので、チームのメンバーや他のチームに配慮しながら進む。途中**二面展望台**があり、ここからも雄大な祖母山系が見渡せる絶好のポイントが現れる。その下部にはアルミハシゴとロープの張られたトラバース地点があるので特に注意したい。ぐんぐん高度を下げていくと**風穴**への看板が現れる。風穴は、冬は暖かい風が吹いてくるが、夏はツララができるなど、このコースの見どころの一つである。やがて沢沿いの下りになるが、何度も渡渉し、滑りやすい岩場もあるので、増水時には注意したいものである。やがて北谷を渡渉し、スギの人工林の茂るコースを進んでいく。幾度か渡渉し、尾根を乗り越すと谷の右岸にそって進んでいく。**祖母山北谷登山口**はトイレ、水場が整備されており、コース全体を概観できる看板が設置されている。帰りは北谷登山口から林道を進み、途中にある**祖母嶽神社**に山行の安全に感謝しながら旧五ヶ所小学校へ帰ろう。